



## 「世界史教育と外国史研究との連携・協働に向けた総合研究

### —岩手県における世界史教育の現状と課題—

研究代表者 吉原秋（岩手県立大学盛岡短期大学部准教授）・研究参加者 小川春美（岩手県立大学盛岡短期大学部講師）・安井もゆる（岩手大学准教授）・鶴島博和（熊本大学教授）・楠義彦（東北学院大学教授）・山本文彦（北海道大学教授）・鈴木道也（東洋大学教授）・小川知幸（東北大学助教）・畑奈保美（東北学院大学非常勤講師）・出村伸（東北学院大学非常勤講師）・長谷川宜之（青山学院大学非常勤講師）・津田拓郎（愛知県立大学非常勤講師）・池野健（東北大学大学院）

#### <要旨>

学校教育において「世界史」はますます重要になると認識されているが、その現状をみると必ずしも有効に機能しているとは言えない側面がある。本研究では、こうした現状を改善するため、ヨーロッパ史研究の立場から、基礎教養的であるとともに問題解決志向型であるような新しい世界史授業の開発・提案を行い、学問研究と教育実践の架橋を目指す。

#### 1 研究の概要

グローバル化により各地の観光業や地場産業が直接世界とつながる機会が飛躍的に増大している現状において、基礎教養的なものであれ問題解決志向型のものであれ、世界の過去を知ることは世界史学習の重要性は以前にも増して高まっている。岩手県内の高校を卒業した生徒の大学・短大進学率は4割程度にとどまっている（全国最低レベル）こと、中学校までの歴史学習がほとんど日本史に限定されていることを考え合わせると、岩手県においては、高校での世界史教育が、学校で世界史を学ぶことができる最初で最後の貴重な機会になっている。全国的には2006（平成18）年のいわゆる世界史未履修問題等をきっかけに、高校での世界史教育と大学での外国史概説の授業、あるいは歴史学研究成果を接合する「高大連携」の試みが積極的に展開されつつある。世界史未履修問題あるいはセンター試験での世界史離れという言説は、高校教育側の抱える問題ではなく大学教育及び歴史学研究が向き合うべき課題となっている。

#### 2 研究の内容

上記のような今日的状況と課題を踏まえ、大学が高校での世界史教育と連携した教育ないし研究のための実践的方途を探求するためには、前提とすべき学生の意識を明らかにする必要がある。そこで、東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方の大学・短期大学の教員の協力を得て、現在の大学生が、高校在学中に世界史A、Bのいずれを履修したのか、大学受験時に世界史科目を選択したのか、という実態と、世界史学習の意義をどのように考えているのか、という意識とについて、質問紙による調査を実施した。

#### 3 これまで得られた研究の成果

全国13校の学生に対して実施した質問紙調査結果を集計・分析したところ、外国語学習の動機づけと外国史学

習の動機づけには関連性があるのではないかと、という仮説が見出された。外国語学習の動機づけに関する「国際的志向性」という概念が外国史学習についても同様に論じられる可能性があることが、県立大学盛岡短大部国際文化学科のほかに他県の外国語学部ヨーロッパ学科、国際コミュニケーション学部国際言語コミュニケーション学科での調査分析から明らかになった。（吉原秋ほか（2017）「世界史履修に関する学生の意識調査と今後の研究の展望」岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集、第19号、63-66.）

また、データの一部を用いてテキストマイニング分析を行い、外国史学習者と非学習者との間での比較検討を行った。その結果、外国史学習者の期待、外国史教育の新たな可能性等が見出された。（小川知幸ほか（2017）「高校での世界史履修に関するアンケートのテキストマイニング分析」岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集、第19号、67-73.）

調査全体では多様な価値観や異文化理解という意義を認める学生も一定数いる中（鈴木道也ほか（2016）「大学における世界史教育の現状と課題(1)―世界史学習に関する大学生たちの意識調査―」岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集、第18号、65-71.）、岩手大学での過去の同様の調査との比較からは、学生が世界史学習に実用知を求める意識の変化も指摘されている。（安井萌ほか（2017）「世界史学習に関する岩手大学生の意識調査」岩手大学教育実践総合センター研究紀要、第16号、93-102.）

#### 4 今後の具体的な展開

学生の外国史学習意欲を促進あるいは阻害する要因を解明し、どのような契機が教育的効果を発揮するのかを明らかにすることが有用であると考え。そのための方策として、学生の世界史学習への意欲、態度を個別に調査し、高校での効果的な授業を観察する等が考えられる。そこから、高等教育機関としての大学での歴史教育と高等学校での世界史教育との有機的連関のための実践を見出すことができるのではないかと。